目次

1 かけがえのない生
一度とない人生だから……坂村真民 2
2 目標をもって
「イ」の字が映った……高柳建次郎 6
3 一筋の道
レッスンから出発……森下洋子 14
栄光の影に……田中稚 18
4 働く喜び
エネルギー母ちゃん……今井美沙子 24
5 自然と人間
北八ヶ岳……ヨハンベーター・ヘーベル／桜井徹訳 28
6 自覚をもって
恩師の一言……鈴木建二 31
7 相手の立場
言葉のキャッチボール……西尾実 34

窓

1 お手をどうぞ……「住」の手帖編集部 38
2 青春の内部エンジン……三上満 39

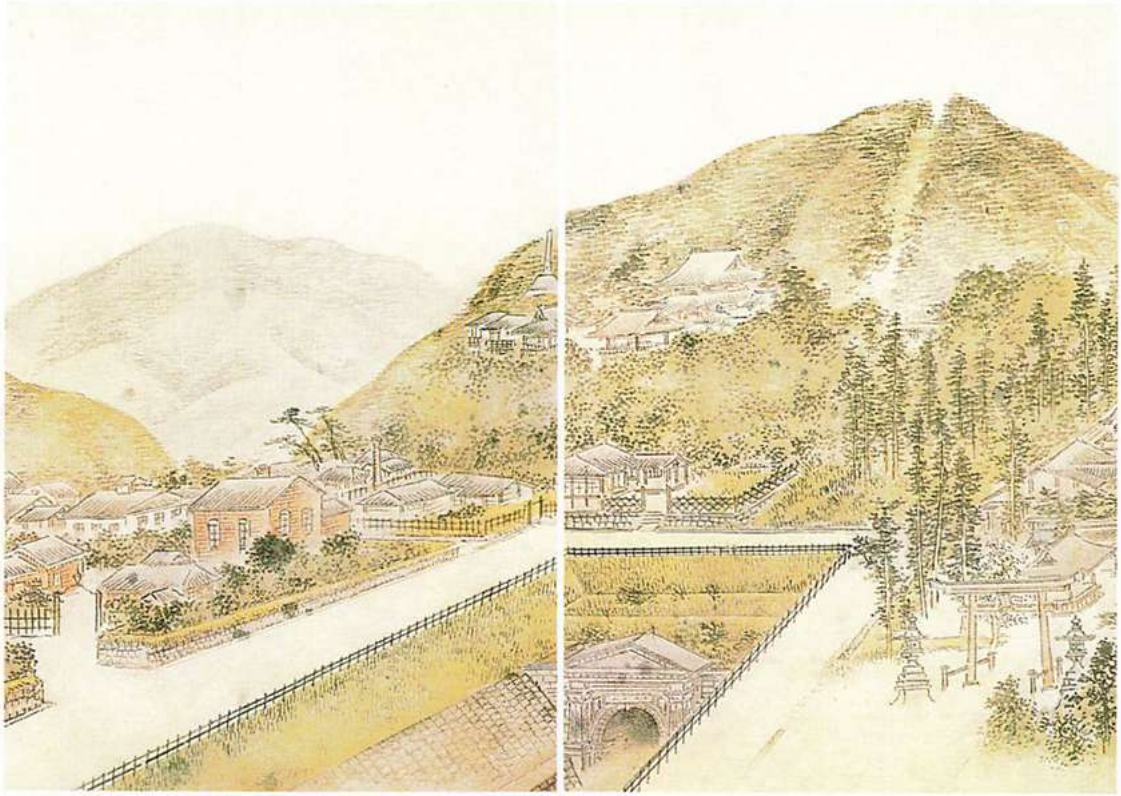
8 節度をもって
雲取り物語……高田和夫 40
なおった病人……ヨハンベーター・ヘーベル／桜井徹訳 46
9 物を大切に
かえってきた本……伊藤海彦 52
10 国境をこえて
ビルマのたて琴……竹山道雄 54
11 生きる力
独りぼっちの人生……新田一夫 62
12 人のつながり
「関係ない」という言葉……三浦綾子 68
13 清純な交際
恋愛のルール……堀正岳 72
14 真の友情
星流きの滝……中江良夫 78
15 郷土を開く
汐水とのたたかい……田村喜子 82
16 個人と社会
おのれの欲するところを人に施せ……高階秀爾 88
となりのラジオ……岡本錦輔 90

窓

3 すぐれた異性を知る……藤田恭平 94
4 カード時代……江崎誠致 95

17 職業に生きる
まんじゅう屋さんの感動……松下幸之助 96
雪ん子の歌……堀尾青史 100
18 ルールを守る
怒りの救助活動……内野政光 106
19 礼儀の意義
あいさつ……田中仙翁 110
20 強く生きる
言い訳はいらない……吉野源三郎 113
21 文化の創造
ドボルザークと黒人霊歌……黒沼ユリ子 116

心に残る言葉……120



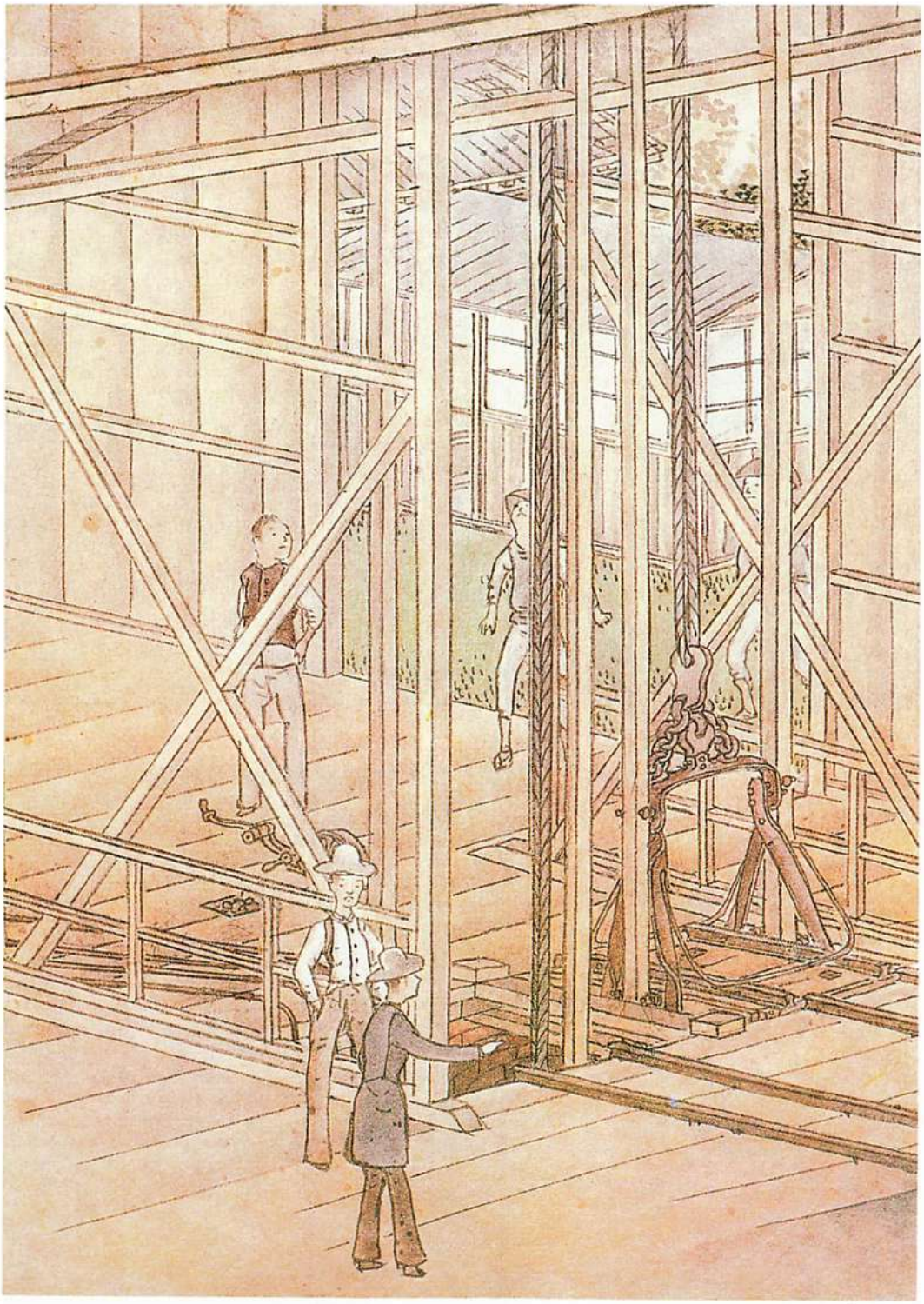
（絵、河田小龍。『琵琶湖疏水図誌』より）

完成した当時の長等山トンネル入口

シャフトは着工して八か月になる。掘削作業より排水にてこずり、一時は絶望の余り断念を考えたほどの難工事だった。

「湧水とのたたかい」

（本文83ページ）



シャフト降り口

15 郷土を開く

湧水とのたたかい

田村 喜子

一般に「疏水」と呼びならわされている琵琶湖疏水は、明治十八年（一八八五年）八月着工され、同二十三年（一八九〇年）四月完成した。以来九十余年、琵琶湖の水は京都に流れ続けている。この水は、日本最初の水力発電を行い、またかんがい用水、運河としても利用された。現在もなお、京都市の飲料水、生活水はほとんどがこの水によってまかなわれている。いわば京都市民にとっての「命の水」なのである。

琵琶湖の水を山を貫いて京都盆地に引く、というこの疏水は、四方を山に囲まれ、交通が不便で、しかも毎年深刻な水不足に悩まされてきた京都の人々にとって、長年の夢であった。明治十四年（一八八一年）京都府知事に就任した北垣国道は、首都が東京に移るとともに衰退していた京都を復興するために、この事業を実行に移すことを決意した。しかし、それは大変な大工事であり、特に全長二千四百メートルをこえる長等山のトンネル工事は、前例のない難工事が予想された。しかも北垣知事はこの事業を「国の事業ではなく、京都府自身の力で行いたい。そのことが京都復興につながるのだ。」と考え、そのための人材を探していた。たまたま実地研究のために京都をおとずれ、疏水のルート調査を論文のテーマにしていた東京の工部大学の学生、田辺朔郎のことを知った北垣知事は、その人物と知識の深さを信頼して、この大工事を託す決意をしたのである。

こうして始まったトンネル工事は、はげしい湧水のために難行した。朔郎たちは外国製のポンプを使い、あらゆる工夫をこらして湧水とたたかった。

工部大学
現在の東京大学工学部。

田辺朔郎
（一八六一～一九四四）
土木技術者。琵琶湖疏水工事のほか、関門トンネルの測量など多くの土木事業にたずさわった。

底位
シャフトを掘る予定の深さ。

隧道
トンネル。

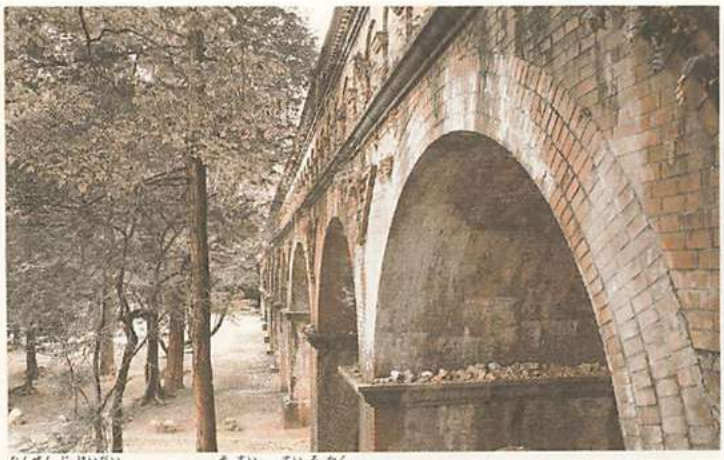
山縣内務卿（山縣有朋）
（一八三八～一九二二）
内務卿は内務省の長官。

シャフト
たて穴。予定の深さまで掘ったら、左右に掘り進む。

ドンキーポンプ、スペシャルポンプ
イギリス製蒸気ポンプ。ドンキーポンプは小型の、スペシャルポンプは大型のもの。

田辺朔郎博士の銅像（京都市東山区）

「主任さん、もう少しで底位に届きまっせ。」
ポンプ主任の大川米蔵が顔をほころばせて報告した。
四月上旬、山裾の桜が咲き誇っていた。
三月二十一日には第一隧道西口掘削に着手した。二十五日には山縣内務卿が工事を視察に来た。
朔郎はシャフト掘削現場にかかりきっていられない。それぞれに現場主任が配置してある。
シャフトは着工して八か月になる。掘削作業より排水にてこずり、一時は絶望の余り断念を考えたほどの難工事だった。だがそれも間もなく五十メートル下の隧道線に達しようとしている。
朔郎の顔もなごんでくる。
「そうかい。ご苦労だったね。排水はうまくいってるんだな。」
「それがねえ、底へ行くほど湧水が多くなりますのや。」
「水脈が集まってるんだな。」
「そうらしおす。二個のドンキーポンプでは追っつきまへん。」
「大型のスペシャルポンプはまだ届かないのかい。」
スペシャルポンプも英国へ注文して、取り寄せているところだ。
「それなら昨日届きましたで。」
「そうかい。それじゃシャフトが底位に達し次第、取り付けにかかろう。」
その日が四月十七日だった。
湧水くみ上げ用の大おけに乗って、大川がシャフトの底に降りた。続いてポンプ係助手の西村が降りた。それからスペシャルポンプがゆっくりつり下げられた。


南禅寺境内を流れる疏水の水路閣

その間にも、ドンキーポンプがくみ上げる水が排水管から吐き出されている。
「どうだい、うまくいきそうかい。」
朔郎は五十メートルの底に叫んだ。
「おーう、もうちょっとで終わりまーす。」
返事が周囲の壁に反響して、地上に上がってきた。
やがて、
「終わったぞう。」
と明るい声が伝わった。
スペシャルポンプにつないだ太いホースから、大量の水を放出し始めた。
「ようし、ドンキーポンプを外せえ。」
ポンプ係が大おけに乗って、ドンキーポンプを据え付けた所まで降りていった。
ドンキーポンプの排水管から水が止まった。
作業員たちが取り外したドンキーポンプを引き揚げにかかった。
その時作業員の一人が大声をあげた。
「主任さん、スペシャルポンプの排水管から水が出て来まへんッ。」
「どうしたんだ。止まっちゃったのかい。」
「へえ、急に止まってしまいました。」
朔郎はシャフトの口から怒鳴った。
「大川君、スペシャルポンプの調子がおかしいッ。」

マイタマイタ　大きなおけを人力で引き上げて水をくみ出す仕組み。

大川の引きつった声が返ってきた。
「ポンプを引き揚げてくれッ。ぐあいが悪いんや。」
二台のポンプが、一台はすでに引き揚げ、一台が故障した。水は容赦なくわき上がってくる。
あっという間もなく、スペシャルポンプは水中に没した。
「*マイタマイタを回せッ。」
朔郎は叫んだ。
〝苦心の涙雨と降る　くめばくむほどわいてくる〟
〝ヨーイト巻いた　ヨヤ巻いた〟
作業員のだみ声が地をはった。
「もう一度ドンキーポンプを取り付けろ。」
揚げたばかりのドンキーポンプが元の位置に降ろされた。
大川は西村に手伝わせて、スペシャルポンプを水中から引き揚げ、修理を急いだ。
「大川君、調子はどうだッ。」
朔郎は懸命の声を張りあげた。
返事がない。
「大川君ッ。」
朔郎はおけに飛び移った。そして怒鳴った。
「降ろしてくれ。」
つるべを伝ってシャフトを降下する朔郎の上に、滝のように水が降りかかった。

カンテラの薄明りを頼りに、大川がポンプを修理している。その上にも水は滝のように落ちる。

「大川君ッ。」

「主任さん、こんな危ないとこへ来たらいかん。」

「わたしに危なければ、おまえにも危ないんだ。」

「わしはポンプ主任や。ポンプのことは任しといてくれ。」

「しかし……。」

「来たらあかん。」

大川の声には「総号令」の朔郎でさえ踏み入れさせない威厳があった。

朔郎はそんな大川を信頼しているのだ。外国製のポンプを改良して使いやすくしたのも大川だった。大川ほど彼のポストに責任をもっている男はいないと、朔郎は思っている。

朔郎は祈るような気持ちをそこに残して、シャフト口へ上った。

全身を水に浸してポンプと取り組んでいる大川を、朔郎はシャフトの縁に立ちつくして目をこらした。それほど長い時間ではなかったが、朔郎には一昼夜もたったかと思えるほど長く感じられた。

ポンプの据え付けが終わったと合図したのは西村の声だった。

機関がうなり、バルブが開かれた。

その途端、排水ホースが身をくねらせ、どおっと水を吐き出した。

「直ったぞお。」
「でかしたあ。」
地上ではだれかれかまわず手を取り合い、歓声が上がった。
シャフトを浸していた水かさがみるみる引いていく。
西村が上ってきた。
大川も上ってきた。その頭から、衣服から糸を引いて水が垂れている。くちびるが紫に変色し、目が血走っている。
朔郎は駆け寄った。
「大川君、ありがとう。もう大丈夫だ。」
大川は何か言おうとするように口を開けたが、そのままよろけるように飯場へ引き揚げていった。
その惟悴しきった後ろ姿に、朔郎は胸をつかれた。
シャフトはついに底位に達した。
「明日からシャフト下底を東西に分岐して、隧道掘削に着手する。今夜はシャフト完成祝いだ。大いに飲んでくれ。」
朔郎の言葉に坑内作業員たちがわいた。
渓谷に早い夕闇が迫っていた。

（新潮社『京都インクライン物語』による）

考えよう

1 水浸しの大川に目をこらす朔郎は、シャフト口の縁でどんなことを考えていたのでしょうか。

2 郷土のために働いた人々の話を聞いたり、読んだりしたことについて考えてみましょう。